

## 昔がたり

むかし神の代のうるはしき日和に、北風そぞろありきにと出でつ。其さがあらあらしものなりければ、花園に来し時、樂しげによそほひつれし薔薇、さゆりなどをひき倒し、実のりたるアプリコ、梨子などをふりおとし、畠にゆきし時は、猶ひときはまさなきわぎをぞしける。青く清き麦生を土にふさせ、赤く愛らしき林檎をもあらしき手もて投げつ。林を訪ひし時は、木の葉みながら空にまきちらし、年ふりてかよわき木どもを、地に倒しなどしつ。

さればなやまされし者ども、風の王のもとにゆきて、ありし事ども訴へつ。王の君は北風をめて、いかなればかくなさけなき事をなしつると問はせ給ふ。北風答へけらく。そは思ひもかけぬこと。我はあしき事なし侍らず。唯愛らしきさうび、さ百合、さては其外の者どもと共に遊ばばやと思ひしのみなるを、といふ。王の君打ちゑみて、いかでさる荒々しき遊びあらむ。さらば今より花さき実のる春夏のほどは、深き谷間にたれこめよ。其折をすごして、

花も実もなき冬の空に出でて、思ふまにまに遊べかしのたまひつ。されは北風は、今も猶木の葉もなく木の実もなく、霜雪の花のみ盛なる冬の空にいでて、そのかみ見たりしくさぐさの花、木の実などをいたづらに尋ねありくとぞ。(原文総ルビ)

底本：阪本幸男編著「橘糸重歌文集」短歌新聞社

平成二十一年(2009)年十月十五日発行

初出：「女学世界」第一巻第四号

明治三十四(1901)年三月十五日発行

筆名：橘糸重子

入力：小林 徹

公開：令和四(2022)年十月十三日

橘糸重 [【散文作品集】](#) に戻る。